



首都圏開発と市民活動の現代史的探究

著者	猪瀬 浩平, 植木 献, 長谷部 美佳, 荻村 哲朗, 可部 州彦
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2019
ページ	38-39
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00003900

首都圏開発と市民活動の現代史的探究

プロジェクトメンバー：猪瀬浩平*、植木 献、長谷部美佳、荻村哲朗、可部州彦（*：代表者）

本プロジェクトは、戦後の日本において市民活動・運動が如何に展開されてきたのか、首都圏近郊を主たる対象に探究するものである。特に、障害者や難民、外国人や外国にルーツのある人などマイノリティと共に生きることを目指して行われてきた活動や、食や農に関わる活動などに焦点をあて、首都圏の開発との関係に留意しながら、市民活動・運動が如何に実践されてきたのか、言説と日常実践の双方の調査・分析を通じて明らかにすることを旨とする。

本年度は6月に、埼玉県における外国人の就労（農業分野）について調査を行い社会理論動態研究所研究員の中田英樹氏から、最新の研究知見について情報提供いただいた。7月には、ボランティア市民活動実習の受け入れ先でもある、社会福祉法人青丘社の三浦知人氏への聞き取り調査を実施した。川崎桜本において文化共生の取り組みを先駆的に行ってきた青丘社において、保育園での障害児の受け入れを一つのきっかけとして、在日コリアンだけでなく、より多様なマイノリティに対する取り組みが意識されるようになった。三浦氏からは、桜本の近隣で展開された青い芝の会の運動との交流についてもうかがうことができた。

8月には、同じくボランティア実習の受け入れ先でもある、NPO法人こえとことばとこころの部屋の上田假奈代氏によるワークショップを実施した。見沼田んぼ福祉農園にかかわる人の中には、かつて釜ヶ崎をはじめとするドヤ街を拠点に労働した経験を持つ人がいる。詩という方法を使いながら、その経験の聞き取りと表現を行うことで、これまで関係がないと考えられていた、さいたま／見沼田んぼと釜ヶ崎などのドヤ街を、人びとが生きた経験として結び付けるための方法を探った。

12月には、埼玉の障害者運動の一つの拠点である越谷市において、農村と障害者運動の交流の様態を探るため、成城大学民俗学研究所研究員の加藤秀雄氏を招いて、当該地域の民俗調査を如何に行うのか議論した。加藤氏の協力を受けながら、年度末にかけて当該地域の調査を実施する予定である。民俗学と障害者運動を結びつける視座はこれまで希薄であり、この調査を通じて首都圏開発を捉える新たな視座の獲得を目指す。

また、研究プロジェクトの一環として、2020年2月18日には障害のある家族を描いたドキュメンタリー映画『ちづる』の上映会と、監督や当事者を交えたトークイベントを下記の要領で実施した。これに加えて年度内をめぐり、本研究プロジェクトの成果として首都圏開発をめぐる論文を執筆する予定である。

●ドキュメンタリー映画『ちづる』上映会&トークイベント

【日 時】 2020年2月8日(土) 14時～17時30分

【場 所】 明福寺（東京都港区三田四丁目4番14号）

【トークイベント登壇者】

赤崎正和氏（映画『ちづる』監督）

猪瀬浩平氏（明治学院大学 教授）

臼井隆志氏（株式会社ミミクリデザインディレクター）

本学「ボランティア市民活動研究」履修学生

【主催】 特定非営利活動法人 Collable

【共催】 明治学院大学 教養教育センター附属研究所 研究プロジェクト『首都圏開発の現代史的探究』